隠岐の島西郷港周辺地区の河川利用の変遷と水辺景観形成

渡邉　真由[1]・福島　秀哉[2]・福井　恒明[3]

[1]学生会員　法政大学大学院　デザイン工学研究科　都市環境デザイン工学専攻

（〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1），E-mail:mwata.ttkh@gmail.com

[2]正会員　株式会社 上條・福島都市設計事務所

（〒162-0065 新宿区住吉町 10-5 鍋倉ビル 2F），E-mail:fukushima@kfa.co.jp

[3]正会員　法政大学教授　デザイン工学部　都市環境デザイン工学科

（〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1），E-mail:fukui@hosei.ac.jp

現在地域資源となっている景観を，地域の生活や生業の変遷との関係から分析することは，その形成過程を理解し，保全活用していく計画づくりを進める上で重要な課題である．島根県隠岐の島町西郷港周辺地区は，八尾川，宇屋川の２本の河川沿いに発展してきた．現在でも台地から住居，河川までをつなぐ路地が残るなど，河川沿いに発展してきた集落空間の骨格が残り，川祭りといった伝統行事も継承されている．その河川沿いの特徴的な水辺の景観は，重要な地域資源となっている．これらの河川は，地域の生活や生業の変化に伴い，港整備前の漁業船の係留，北前船の寄港地，荷上場等に利用されてきた．本研究の目的は，これらの河川利用の変遷と現在の水辺景観の形成過程の関係を明らかにすることである．河川利用の変遷に関する文献調査とヒアリング調査，実測調査およびアンケート調査から水辺空間の変化過程を分析した．

Key Words: *river use，waterfront，alleys，Fishing village，Okinoshima town*

1.　はじめに

(1)　研究背景

現在各地の地域資源となっている景観の多くは，住民がその土地の自然秩序に対し，社会秩序を図りながら対応する中で，築かれ，維持されてきたものである．これらの景観の保全・活用を含めたまちづくりを進めるために，その形成過程を，地域の生活や生業の変遷との関係から理解することが求められている．地域資源としての景観の保全・活用について，これまでは特に伝統的建造物群保存地区や世界遺産，重要文化的景観等の計画づくりの議論などにおいて着目されてきた．しかし近年地域の固有性，多様性を活かした住民主体のまちづくりが求められる中，上記に選定されていない地域を含め，より幅広い地域において大切な課題となってきている．

本研究の対象地である島根県隠岐の島町は，玄関口となる「西郷港玄関口まちづくり計画」を策定し，地域資源を活かしたまちづくりを進める中で，地域住民との協働を通した，歴史的な地域特性の理解や，地域の価値の共有が求められている地域の一つである．

隠岐の島町西郷港周辺地区は，八尾川，宇屋川の２本の河川沿いに発展してきた．これらの河川は生業に関わる，港整備前の漁業船の係留，北前船の寄港地，荷上場等の利用や，生活での利用が行われてきた．現在でも河川沿いに形成された集落空間の骨格や，集落背後の台地から水辺までをつなぐ路地が残り，特徴的な景観を有している．また川祭りといった伝統行事も継承されている．この河川沿いの水辺景観は，地域住民との協働により策定された「西郷港玄関口まちづくり計画[1)]」において，「宇屋川と八尾川は，西郷港玄関口地域の骨格をつくるとともに，まちに魅力を与える要素として大切な役割を果たしています．そのため，川沿いの景観を活かしたまちづくりが必要です．」と指摘されるなど，現代のまちづくりにおける重要な地域資源となっており，その保全・活用に向けて，生業や生活を通した河川利用の変遷と，現在の水辺景観の形成過程の関係の解明は重要な課

題である．

(2) 研究目的

以上より本研究では，島根県隠岐の島町西郷港周辺地区八尾川・宇屋川の河川利用の変遷と現在の水辺景観の形成過程の関係を明らかにすることを目的とする．

(3) 既往研究と本研究の位置づけ

空間的な地域特性の分析や計画への反映に関する研究として，後藤ら[2]は集落の個性を造り出しているものとして住居の表層と街路を挙げ，その変容から村民の嗜好や価値観を具現化するものとしてこれらが受け継がれている可能性を指摘している．また，安藤ら[3]は文献調査，ヒアリング調査，現地調査から，漁業集落の成立要因と現在受け継がれている公共空間の私的利用を把握し，両者の重ね合わせから地域特性の継承として解釈できる可能性を指摘している．

水辺利用に関する研究としては，中嶋ら[4]が地域コミュニティの構造と成立過程，維持要因から，水辺景観形成における地域コミュニティの役割と必要性を明らかにしている．

実測調査に関する研究としては，対象地の街路景観の特徴を論じる研究[5]や，対象地におけるまちづくりや景観形成といった計画反映を目的に集落と町家の空間特性を各家の機能の変遷に着目して論じる研究[6]がある．また，長坂[7]は一般的な公共空間の計画理念上の知見を得るため，「みち」を含めた集落の屋外空間の性質を，現状形態と経年変化の調査分析により明らかにしている．

対象地である隠岐の島町や西郷地区に関する既往研究としては，田中[8]，田中[9]，田中[10]による隠岐の歴史・地理に関する研究，小林ら[11]による舟小屋の分布と所有，建築工法について現地調査やヒアリングから隠岐の島の気候風土・生業や地域文化との関連を考察する研究がある．

本研究は，集落形成および河川利用の変遷と現在の河川空間の実測調査を通して，水辺景観が形成・維持されてきた経緯と現状を関連付けて分析することにより，その形成過程と特性を示すことを試みる点に特徴がある．

(4) 研究手法

本研究では，西郷港周辺地区の生業，集落空間の歴史，年中行事等に関する文献調査（**表-1**）と，補足的に住民や漁業組合職員を対象としたヒアリング調査（**表-2**）を行った．以下，文中括弧内の略記号は**表-2** 内のヒアリング対象者を示す略記号と対応する．また，西郷港周辺地区の街路と埋立地の形成年代を明らかにするため，絵図および空中写真（**表-1**）を用いて道路整備や埋め立て等，空間の変遷を示す図を作成した．

表-1 文献調査概要

	著者・編者	発行年	名称
絵図・空中写真	出雲大社西郷分院	不詳	西郷港周辺埋立の変遷
	大西音吉	1920年	西郷町略図(『西郷町誌』内)
	国土地理院※	1948年	空中写真
	国土地理院	1977年	空中写真
	国土地理院	1989年	空中写真
	国土地理院	2015年	空中写真
郷土史	大西音吉	1920年	西郷町誌
	隠岐島庁	1972年	隠岐島誌
	佐々木高司	2015年	写真アルバム　隠岐の昭和
	西郷町合併三十周年写真集編さん委員会	1989年	日本海に浮かぶふるさとアルバム　西郷
	隠岐汽船	1958年	隠岐航路史
	隠岐島庁	1916年	隠岐乃家苞
	横山弥四郎	1966年	隠岐の伝説
行政資料	島根県	2006年	八尾川水系河川整備計画
	島根県	2005年	八尾川水系河川整備基本方針
	隠岐の島町	2020年	島根県隠岐の島町西郷港玄関口まちづくり計画

※　米軍陸軍撮影

表-2 ヒアリング概要

日時	対象	属性	内容
2023年7月21日	ア	東町町内会連合会長	過去から現在にかけての川沿いの利用・共同利用している空間の有無，近年の川沿いの建物の増築・建て替え，災害の頻度と対策，行事など
2023年7月21日	イ	西町御崎地区自治会長	
2023年7月22日	ウ	港町元自治会長	
2023年7月26日	エ	西町上八尾地区自治会長	
2023年7月24日	オ	漁業組合職員	漁業の変化，災害時の対応など

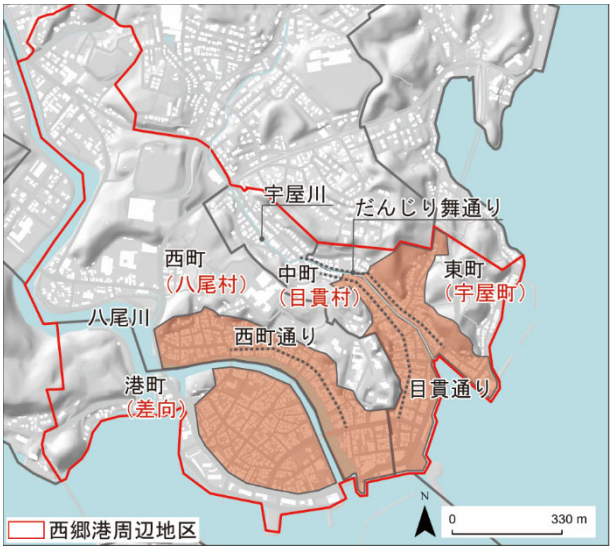


図-1 西郷港周辺地区位置（基盤地図情報を基に筆者作成）

次に，現在でも漁業船が係留するなど特に特徴的な河川景観を有する八尾川沿いを対象に，現在の河川沿いの風景や利用の特徴を把握する実測調査を行った．

さらに，地域住民の水辺の活動や河川沿いの風景への思いを把握するため，アンケート調査を行った．アンケート概要については 4 章で詳述する．

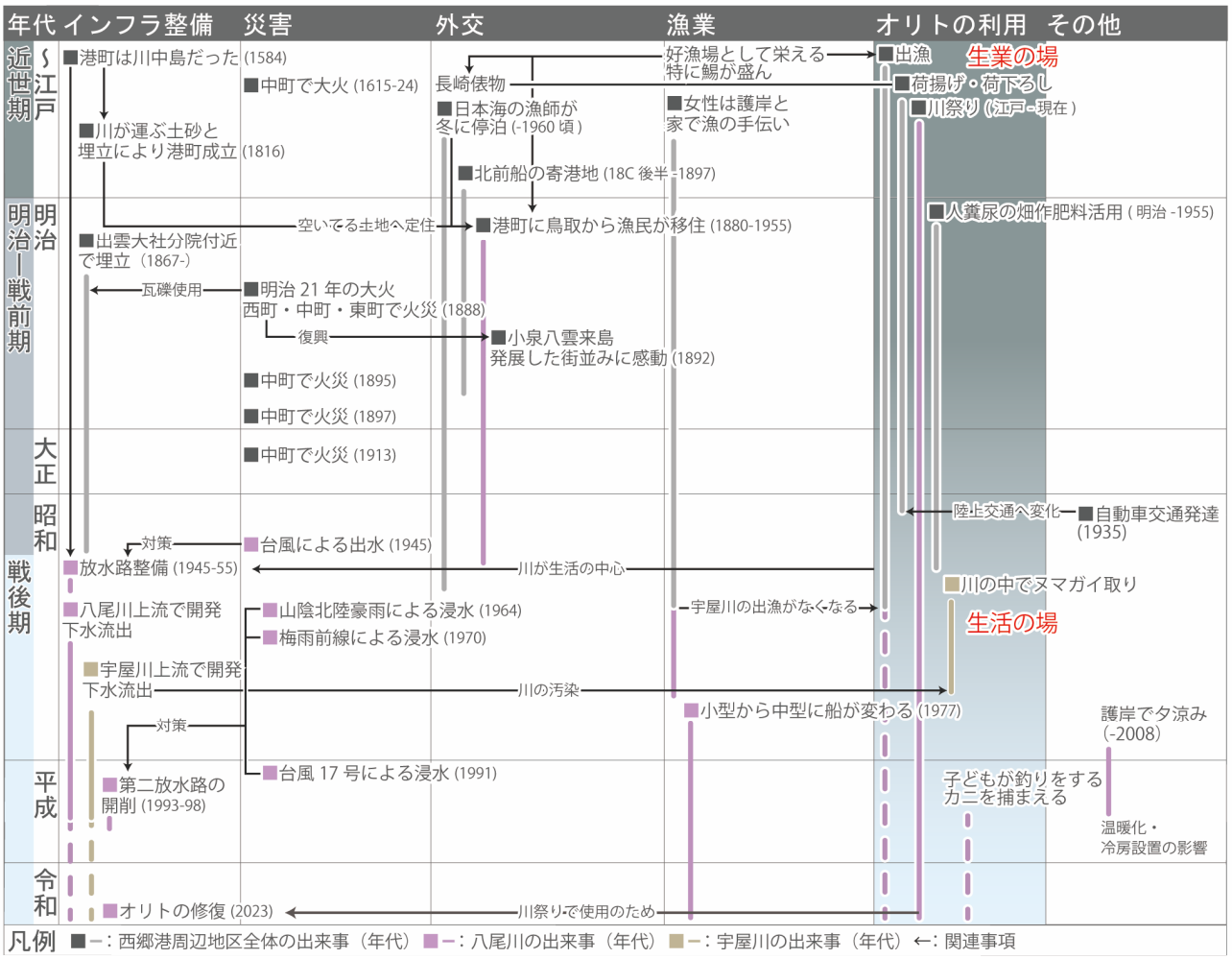


図-2　河川空間及び河川利用の変遷

(5)　対象地の概要

本研究の対象地である島根県隠岐郡隠岐の島町は，日本海に位置する隠岐諸島の主島，島後の全域を占める自治体である．西郷港周辺地区は，島内南部の東町，中町，西町，港町によって構成される中心市街地である（**図-1**）．それぞれ近世集落である東郷宇屋町，目貫村，八尾村，および明治以降，漁師町として栄えた指向を基礎に発展してきた．明治 7（1874）年に宇屋町，目貫村，八尾村が合併し西郷港町となり，宇屋町を東町，目貫村を中町，八尾村を西町と改めた．昭和 29（1954）年に西郷，東郷，磯，中条が合併し，さらに昭和 35（1960）年の中村の合併，平成 16（2004）年の布施村，五箇村，都万村の合併により現在の隠岐の島町が発足した[12]．

西郷港周辺地区では，東町の御碕神社で 3 年に 1 度行われる宇屋のだんじり舞，中町の諸浦神社の例大祭，西町・港町合同で実施される 7 社合同例大祭や川祭りといった伝統行事が，地域住民を主体に行われている．

西郷港周辺地区では，東町のだんじり舞通り，中町の目貫通り，西町の西町通りといった集落の中心となる通りから，各河川につながる路地が多数存在し，特徴的な集落空間を構成している．それにより集落から路地を通して，各河川が視認可能である．路地の先には桟橋の設置や船の係留が見られる．また，路地には隣接する住居の私物が置かれている箇所がいくつも見られ，こうした風景が特徴的な河川景観を形成している．

2.　水辺空間及び河川利用の変遷調査

(1)　近世期の西郷港周辺地区

本章では，現在の集落空間の基礎が形成された「近世」と，近代化の中で生業・生活の河川利用が拡大した「明治から第二次世界大戦前（以下：戦前）」，高度経済成長の中で，生業上の河川利用の頻度が減少した「第二次世界大戦後（以下：戦後）」の 3 期に区分し，各時代の生業や生活上の河川利用，河川空間の特徴とその関係を整理する（**図-2**）．

a)　河川を中心に発達した集落

近世期には，以下の 3 つの地理・地形的条件から八尾川や宇屋川を中心に集落が発展した．1 つ目は，隠岐の島は火山島であり，500m 級の山々が連なり平地が少ないこと，2 つ目は，隠岐近海は暖流の対馬海流と寒流の

リマン海流の影響を受ける好漁場であり，漁業が盛んであったこと[13]，3 つ目は，北前船の寄港地として風待ちや物資の補給基地の役割を担っていたことである[14].

b) 漁業による河川利用

近世の隠岐の島経済の発展の中で中心的な地位を占めていたのは漁業である．干鮑や鱶鰭（ふかひれ），煎海鼠（いりこ）といった遠距離輸送に耐える海産物製品を対中国輸出品として扱い，隠岐の島は山陰地方で幕府が最も力を入れた長崎俵物生産地となった[15]．特に鰐は近世期の代表であり，釣りあげたイカは各家庭に持ち帰った後に鰐に加工していた[16]（図-3）．また，好漁場である特性から，鳥取県や島根県などから隠岐の島近海へと出漁する船も多く存在した[17].

c) 北前船の寄港と問屋

享保 4-11（1719-1726）年の記録[18]によると，北前船の寄港では宇屋川に 5 人から 6 人乗り，八尾川に 4 人から 5 人乗りの小さな帆船が入り込んでいた．さらに，八尾川では北前船で運ばれてきた荷物を小船に小分けしてから各蔵に運び込んでいた．また島内の輸送手段としても河川の舟運が主流であった[19].

天保から弘化期には，目貫村と宇屋町に俵物の運搬船の世話役が配置されるなど，特に宇屋川沿いは商業的な機能が発展した[20]．このように近世期の西郷港周辺地区において，両河川沿いは生業の中心であった.

d) 川祭り

八尾村では八尾川の安全を祈る川祭りが行われていた．絵図には，提灯をぶら下げた船に舞台を設えて水上のお旅である「にわか」を行い，その前面には 40-60 艘の小船を連ねて桟敷を作る様子が描かれている[22]（図-4）.

e) 近世期のオリト利用

絵図を確認すると，集落の中心となる通りと河川をつなぐオリト（下り戸）と呼ばれる路地がある（図-5）．現在，オリトとは，河川へ下りるための階段や路地のような私有地を指し，その多くが共有地である．所有者は各集落の中心の通りである現在のだんじり舞通り，目貫通り，西町通りよりも台地側の世帯であることが多い．オリトは，河川沿いに家を持たない住民が，漁業や舟運といった河川利用を円滑に行うために設置されたものである（ア・イ・ウ）．近世期の漁業ではオリトに漁船が係留され，舟運ではオリトを通して荷揚げを行っており，河川沿いの納屋や蔵庫，さらにその奥へと荷物が運び込まれていた（ア・イ）.

f) オリトを有する八尾村の集落空間の特徴

図-5 に八尾村の町並み図を示す．絵図には「下り戸」と記載されている．また，ヒアリングより無記名の路地にも現在オリトが含まれることがわかった（ア・イ）．そこからオリトと判断できる場所及び「下り戸」と記載されている a～n の計 14 か所を抽出した.

八尾村は西町通りを軸とした列状集落である[23]．多くの土地で西町通りを挟んで両側に同じ所有者の敷地が跨っており，通りよりも東側に本家，西の河川側に分家や納屋や蔵庫などを設置していた[24].

g) オリトを有する宇屋町・目貫村の集落空間の特徴

宇屋川沿いは俵物の集荷をする板屋や地主・帆船所持者・船宿・綱元の役割を担う庄屋や，目貫村の蔵屋・宇屋町の梅之屋といった廻船業者がいた[26][27]．河川が生業の場の中心であったことから，河川沿いにオリトや納屋を有していた（ア）.

以上，近世期は水産物の商品化や廻船業の発達など生業が河川を中心に成立していた．また宇屋川には商人が多く住み，廻船業が発達していた．これらの河川沿いの生業利用を背景に，集落構造やオリトという共有地が成



図-3 鰐づくり [17]

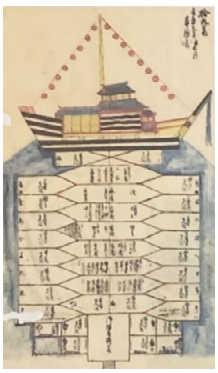


図-4 近世の川祭り [21]

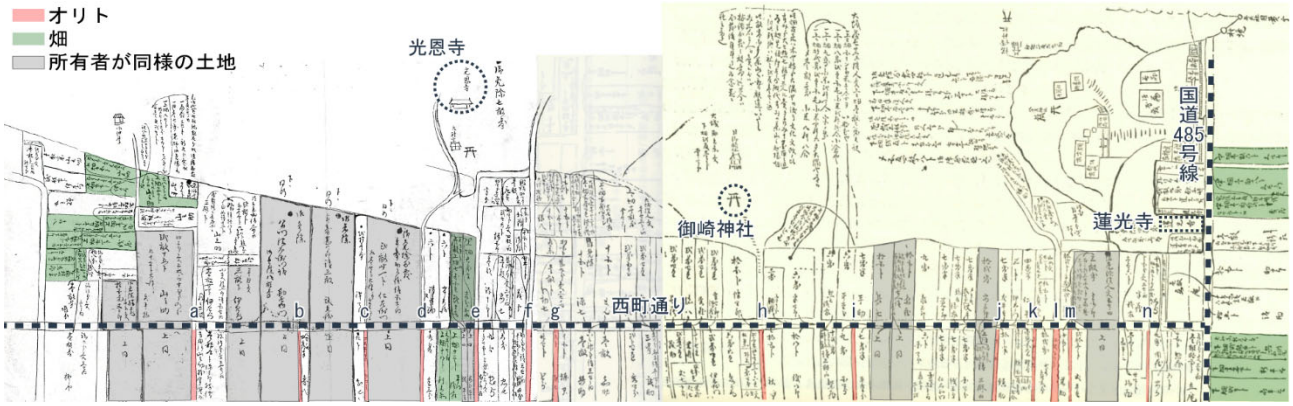


図-5 八尾村の町並み図（参考文献 25 及びヒアリング対象者イの提供資料に筆者加筆）

立し，川祭りなど伝統行事が発展したと考えられる．

(2) 明治から戦前期の西郷港周辺地区

a) 近代化する漁業

明治初期に全国的に漁業の近代化へと技術の向上が図られる中，隠岐の島町では近世期以降，輸出物の核となった鰯を中心とした漁業を続けた結果，近代化が遅れていた[28]．その後，山陰地方を中心とした本土側の漁業従事者の流入によって，漁船の動力化に伴う漁場の拡大や鮮魚中心へと漁獲構造の変化，さらに機船底曳網漁業の発達といった近代化が進められた[29]．

b) 舟運の変化

当時島内の木材，米，雑穀等の輸送について，低廉な輸送コストと，安全性，迅速性などを理由に[30]，沿海村落へは船舶輸送が主であり，人畜輸送は補助手段であった．

明治 30（1897）年頃，汽船の発展により風に頼る北前船の寄港が減少した[31]．明治 28（1895）年隠岐汽船が設立されると，昭和 20（1945）年頃までには，輸送の約 70%が隠岐汽船の取り扱いとなり，島外との舟運に河川から出ることは少なくなった[32]．

島外との流通は減少する一方で，漁業の拡大や島内の水上交通の必要性から，かたちを変えて両河川の生業利用は継続された．

c) 指向（現港町）への居住開始

明治時代の集落空間の変化として，指向（現港町）への居住開始が挙げられる．この地は元々海だったが，八尾川が運ぶ土砂の堆積と人口埋立により陸化された[33]．指向は近世からイカ釣りのために出漁していた鳥取県の漁師が多く移住し，成立した漁師町である（ウ）．明治 13（1880）年までは西町との間に橋はなく，裁判所と人家 2 軒，船小屋数件といった土地利用であった．その後明治 14（1881）年に八尾橋と裁判所の新築に伴って移住が進み，大正 8（1919）年 350 戸，大正 12（1923）年 430 戸，昭和 30（1955）年 670 戸と急激に人口が増加した[34]．各移住者が自身の船の係留場所に近い場所に家を建てていった結果，近世集落を基盤とする他の 3 町とは異なり，入り組んだ集落空間となっている（ウ）．

d) 明治から戦後期のオリト利用

明治から戦後期では，漁業の近代化が見られたが，両河川沿いには変わらず漁業を営む住民が居住し，オリトを通じて河川から出漁していた（ア・イ）．

また，島内舟運においても陸上交通が発達するまでは，オリトを通して荷物の受け渡しが行われていた（ア・イ）．

以上，漁業の近代化が見られたものの，漁船は河川沿いに多く係留し，河川を利用した生業を成立させるためのオリトが継続した．

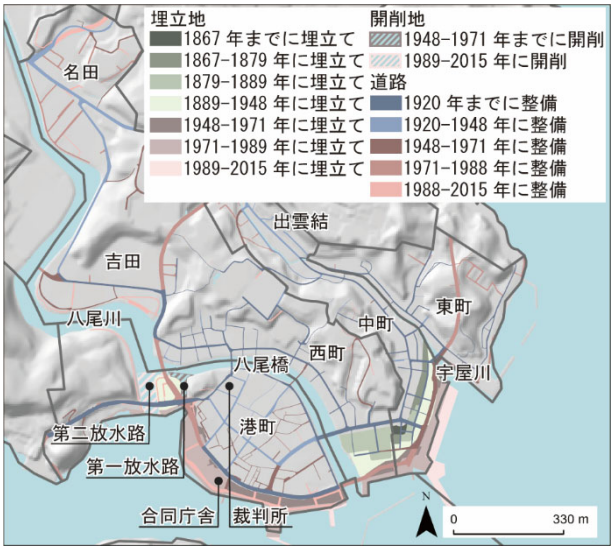


図-6 道路・埋立地変遷図



図-7 昭和 10（1935）年頃八尾の川祭り [37]



図-8 現在の川祭り（2023 年 7 月筆者撮影）

(3) 戦後の西郷港周辺地区

a) 戦後の漁業の衰退

戦後すぐに現在の合同庁舎付近でイワシを干す風景や，昭和 30 年代には 1 隻で 1,000 から 2,000 杯釣れるほど豊漁であったイカを女性が捌いて干す様子が町中でみられた[35]．また，昭和 50 年代に八尾橋の袂で行われたわかめ干しや，八尾川の両岸にびっしりと漁船が係留するなど，八尾川沿いは天然の漁港として漁業が盛んな様子がみられた[36]．以上，この頃までは家族総出で行っていた漁業の姿がみられた．しかし，昭和 52（1977）年頃に漁業の企業化や小型船から中型船への乗り換えが進んだ（ウ）．船の中型化により八尾川の橋下を通れなくなり，港が整備されると，河川から出航する船は減少した（オ）（図-6）．また宇屋川でも漁師が住むまちだったが，昭和 45（1970）年頃から漁船が見られなくなった（ア）．

b) 陸上交通の発展

西郷港周辺地区における河川利用の転換点の一つとして，交通の変化がある．昭和 28（1953）年以降，離島振興法の施工により，幹線道路の整備，島後環状道路の新設が進められた[38]．その後，隠岐で住民の交通機関として自動車が本格的に定着したのは昭和 29（1954）年以降である．昭和 30 年代以降，自家用車，貸車が急激に増加すると，島内の交通・輸送手段は水上交通から陸上交通へと変化していった[39]．

c)　祭りの継続

近世の絵図に描かれた川祭りは現在も行われている．昭和初期の川祭りの写真からは，舟に神輿を載せ，多くの漁船に人が乗り，連なっている様子が確認できる（図-7）．川祭りには子どもの踊りも奉納され，河川を下る途中の何か所かに船を止めて踊っていた[40]．戦後以降は舟に神輿を乗せることをやめ，現在は楽隊と神主様が乗る舟が二隻のみ出ている（図-8）．

d)　河川沿いの遊びの変化

かつて行われたヌマガイ取り，しじみ取りといった河川での遊びは，昭和 35（1960）年ごろからみられなくなった（ア）．現在では，オリトからカニを取る様子や釣り糸を垂らして子どもが遊ぶ光景に変わっている（エ）．子どもの遊び以外にも，八尾川の護岸は夕涼みや朝のラジオ体操に利用されている（エ）．

e)　水害と対策

八尾川沿いは幾度も浸水被害を受けてきた．対策として放水路や，利水を兼ねたダムの建設が行われたが，堤防建設は行われていない（表-3）．その理由として，八尾川放水路が開削され始める昭和 20（1945）年当時を振り返ると，河川からの出漁など河川沿いが生業の場として機能していたこと，河口域のため水害時の浸水時間が短いこと（ウ），集落空間の構造上整備用地がないこと，近世期の絵図に描かれているように放水路掘削場所である港町が天正 12（1584）年当時，海だった[42]ことなどが理由として考えられる（図-9）．その結果洪水対策後も，集落空間とともに，河川へとアクセス可能な水辺空間は維持された．

f)　八尾川・宇屋川上流部の開発

空中写真で確認すると，東町宇屋川上流部の出雲結には昭和 52（1977）年から住宅地が広がり始めている（図-6）．一方で，西町八尾川上流部の吉田には昭和 40（1965）年，名田は昭和 52（1977）年には住宅地が広がった．西郷町は明治以降，水田や畑の肥料にイカの内臓や人糞尿を用いており，昭和 35（1960）年頃まで各家庭のから汲み取り船で回収していた[44]．その後，人糞尿が回収されなくなり，昭和 51（1976）年頃，下水道施設の不備のため，生活排水が不完全な側溝，排水路を通じて河川を流れている状況であった[45]．その後も平成 12（2000）年になっても，下水道普及率が 12.6%と低く[46]，河川の水質汚染から，子どもたちの遊び場としての役割が減った可能性がある．

g)　戦後以降のオリト利用

以上のように，戦後以降もオリトを有した近世由来の集落構造が保たれている一方で，河川の生業利用頻度は低下した．特に，宇屋川では昭和 40（1965）年を境に漁船の姿が消え，八尾川では昭和 52（1977）年を境に河川沿いに係留する漁船が大幅に減少した．また，上流部の開発の影響により，河川の中での活動も見られなくなった．オリトではかつての生業利用がなくなった一方で，日常的な利用や川祭りは現在でも行われている．

表-3　八尾川の主な水害と対策[41]

年代	水害被害範囲
S20(1945).9	台風による出水
S20 代(1945-1955)　八尾川放水路開削	
S39(1964).7	山陰・北陸豪雨による浸水被害
S45(1970).7	梅雨前線による浸水被害
H3(1991).9	台風 17 号による洪水
H2-12(1990-2000)　銚子ダム建設	
H5-10(1993-1998)　第二放水路の開削	
2020(R2).8	豪雨災害による洪水
2021(R3).8	台風による洪水

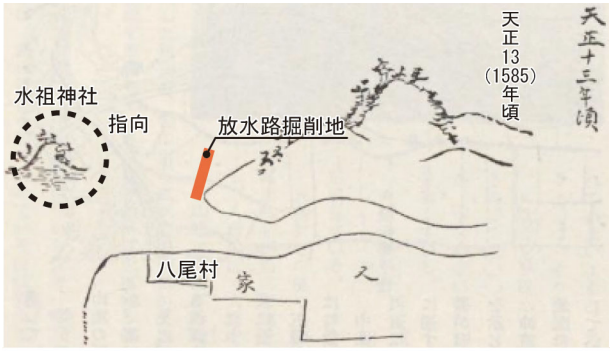


図-9　天正 12（1584）年の港町（参考文献 43 に筆者加筆）

(4)　小括

西郷港周辺地区に住む人の大半が河川を生業の基盤としていたことから，河川沿いにオリトという共有地を設置し，河川とまちがつながるような構造を作り出した．

戦後以降，漁業の企業化及び漁船の中型化や島内の陸上交通への変化により，河川沿いでの個人の生業利用は減少した．

一方，無堤による水害対策や，川祭りなどの行事と生活の場の一部としてオリトなど水辺空間の利用の継続，共有地であるオリトの空間的な存続などにより集落空間の構造が維持されたと考えられる．

次章から，河川沿いに発展してきた西郷港周辺地区の河川空間の特徴的な要素であり，共有地であるオリトに着目して，河川利用と河川空間の特徴について論じる．

3.　現在の八尾川沿いの空間的特徴

(1)　実測調査の対象と方法

本章では，文献調査・ヒアリング調査より，現在でも近世由来の集落空間の特徴や一部の河川利用が残る八尾川沿い，特に河川利用と密な関係した共有地であるオリトに着目し，実測調査から河川空間の現在の特徴を把握した．調査は西町の八尾橋から天神橋までの区間で，西町通りより河川側を対象にした．調査では，①西町通り

から八尾川が視認可能な領域，②私物のはみだし，③建物の出入り口の位置，④川側からのアプローチに着目した．

(2)　西町通りから八尾川が視認可能な領域

オリトは西町通りから八尾川へ垂直に伸びることから，水面や対岸の港町の船が確認でき，視線の抜けができる．西町通りから河川が視認できるという特徴を河川沿いの景観を作る一要素と捉え，西町通りから河川が視認できる場所をオリトがある場所とそれ以外の場所で色分けを行った（図-10）．西町通りから河川が視認可能な領域を確認すると，愛の橋より南は視認可能な各領域が狭いのに対して，愛の橋より北は視認可能な領域が比較的広い箇所が 3 か所あった．

河川が視認可能な領域は，建物間の隙間から水辺が確認できる場所（A）やオリトが主である．河川が視認可能な領域のうちオリトがある場所は 11 か所あった．御崎神社から八尾川までは，オリトも含めて一直線に道が伸びるため，御崎神社から水面が視認可能となっている（B）．また，令和 3（2021）年に新設したゲストハウスの“Hito-Naka”の駐車スペースには塀といった視界を妨げるものが設置されていないため，西町通りから八尾川へと開けた空間になっている．愛の橋以北には建物がなくなり，上記のような駐車場や空き地によって，視認可能な領域が比較的広い箇所が出来ている．

河川が視認不可能な場所には，建物間が密に建っている場所（C）や植栽が生い茂っている場所（D），建物の周りに塀が建っている場所がみられた．建物間が詰まっている場所は古い家に多く，建物の周りに塀が建っているのは新しい家に多くみられた．

一部視界が遮られている箇所はあるものの，全体として通りから河川が見える空間が多い．この風景は河川が生業の場であったり，河川沿いの建物に住んでいなくても河川の様子を確認していたりした頃から存続する，集落空間の特徴として捉えることができる．

(3)　現在のオリトの特徴

a)　現在のオリトの型の抽出

図-5 やヒアリングから，かつてのオリトの位置を特定できた場所は 14 か所である（図-11）．現地調査から，河川へつながる道空間としての機能を有している 10 か所と，堀や植栽により通行不可能になっている 4 か所に大別された．さらにオリトの先の桟橋の設置（5 か所），うち桟橋に下りるための階段（1 か所）がみられた．

現在オリトの多くには，物干し竿，植木，木材，土，脚立，ガス管，油缶，洗濯機など，私物とみられるものが残置されている．また通りに面した出入り口とは別に，オリトや河川側に出入口がある建物が 7 か所，水道の設置が 2 か所，トラックの駐車が 1 か所みられた．

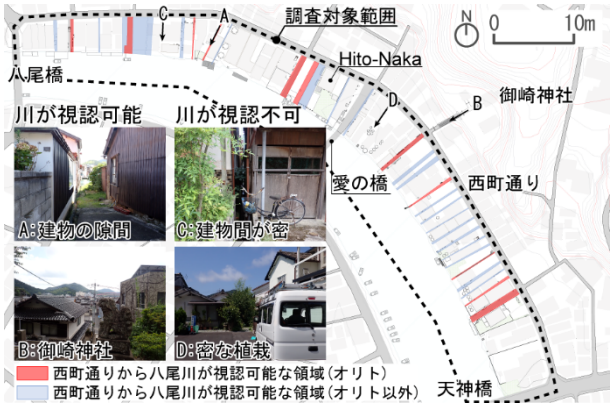


図-10　西町通りから八尾川が視認可能な領域

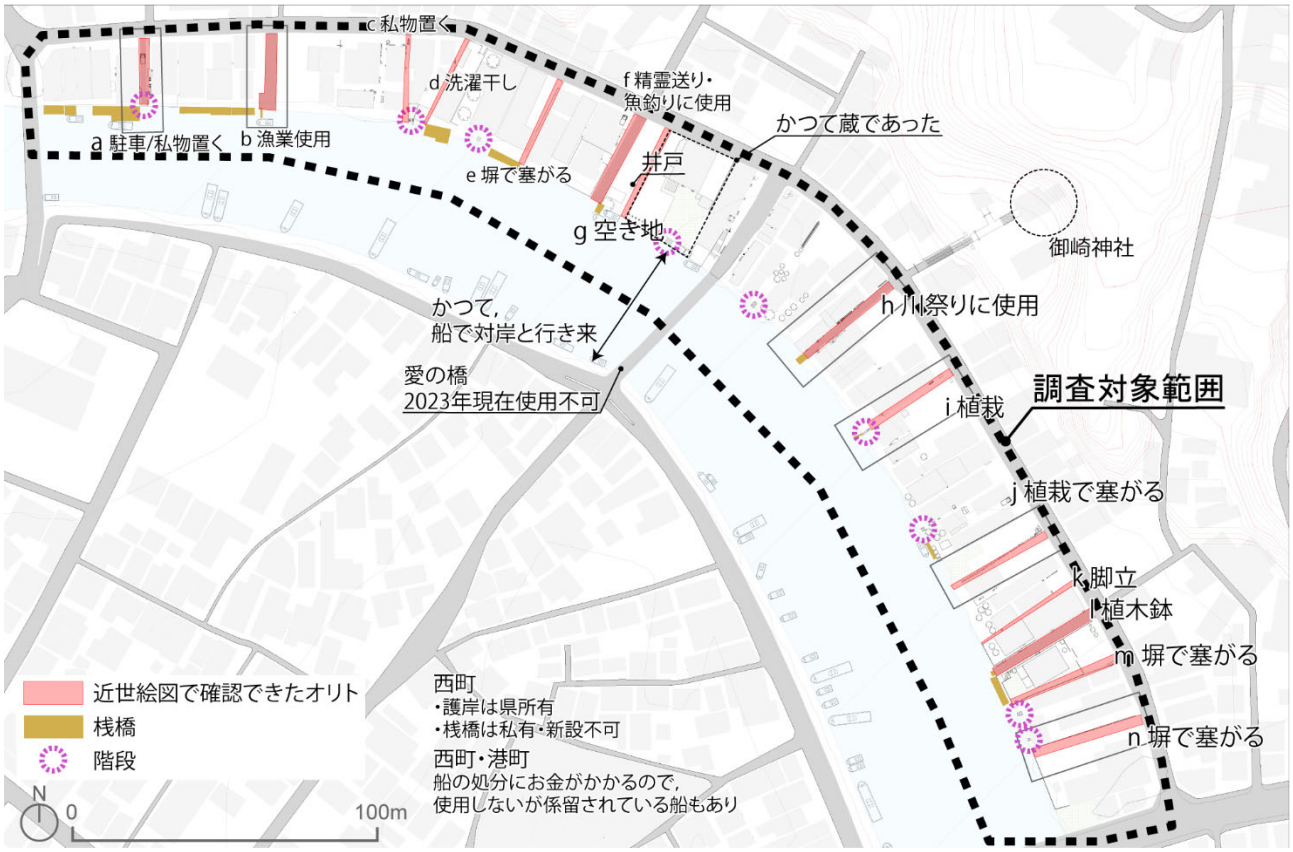
各オリトの利用状況をみると，過去の利用では畑作物に人糞尿を使用するため汲み取り船で回収していたオリトが 3 か所，その他洗濯や釣りなどの利用がみられた．現在では，漁業や川祭りといった河川に出る利用が 3 か所，その他河川の利用はないが，オリトの中で洗濯干しや水やりといった利用が見られた．

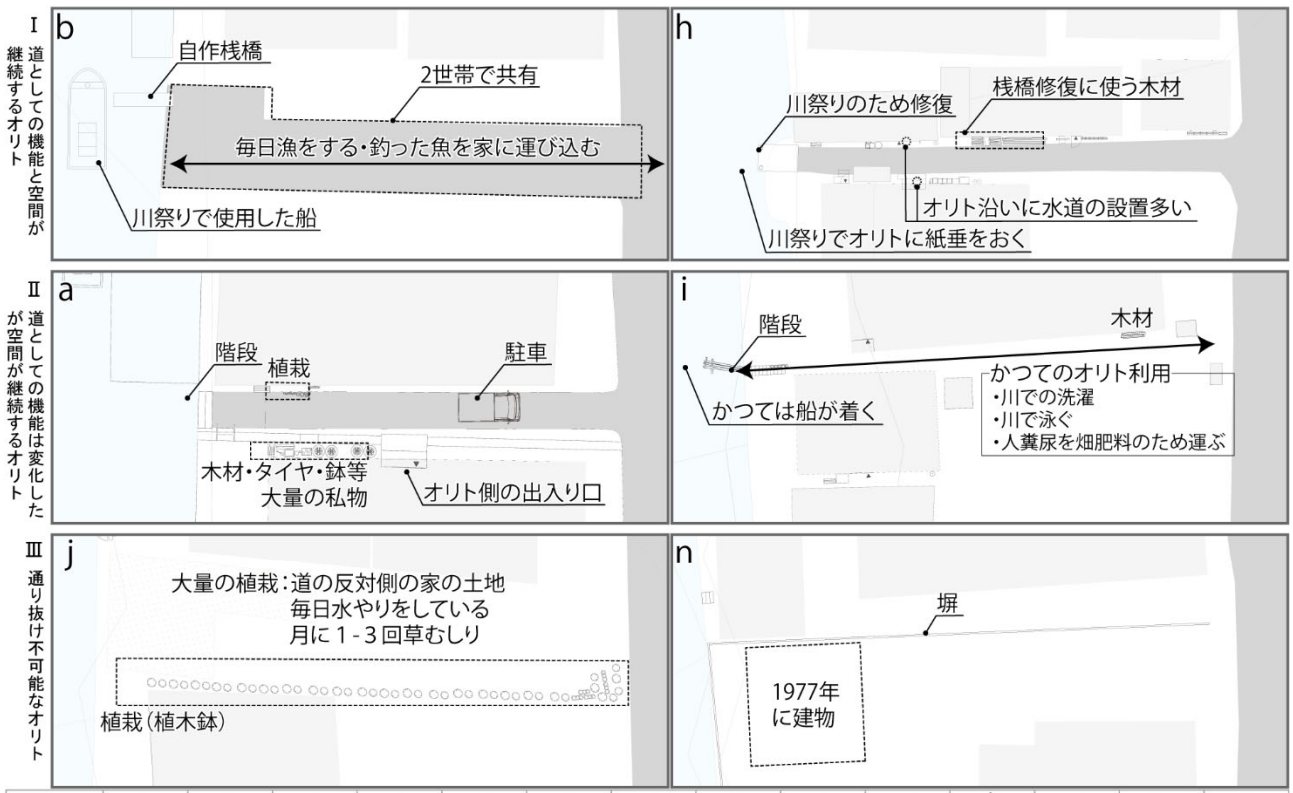
以上より，現在のオリトの状況は，以下の 3 パターンに大別できる．道空間が受け継がれているオリトⅠが 3 か所（b，f，h），道空間としての形態は継承しているが利用形態が変化しているオリトⅡが 7 か所（a，c，d，g，i，k，l），道空間が喪失し現在は通行不可能なオリトⅢが 4 か所（e，j，m，n）であった．各パターンのうち，過去の利用・現在の状況・現在の利用について，明らかになったものが多いオリトを各パターンにつき 2 か所選定し，**図-11** に詳述した．

b)　現在のオリトの型の分類

Ⅰのオリトには趣味で漁を行うため，オリトを行き来する場所（b）や，川祭りに用いるために崩壊寸前の桟橋を御崎地区で修復した場所（h），お盆に毎年実施する精霊送りの船を出すために用いる場所（f）がある（イ）．Ⅰの 3 か所には，オリトの先に桟橋があることが特徴的であり，河川との行き来が容易である．これらのオリトでは頻度は異なるが，今もなお河川へ下りるための利用がされている．

Ⅱのオリトは河川へ下りるための利用はなくなったものの，隣接する建物にはオリト側にも出入り口が儲けられている．また，漁具は見られなかったがタイヤや洗濯物，植木鉢といった私物が置かれ（a，c，d，i，k），トラックの駐車も見られる（a）．また，Ⅱの 7 か所のうち，オリトの先の桟橋の設置が 1 か所，階段の設置が 1 か所，桟橋に降りるための階段の設置が 1 か所，何も設置されていないか所が 4 か所だった．オリトの所有者は主に通りより東側の住人が多いが，河川側も地権者が同じであることが多いため（図-5），オリトへの私物のはみだしが可能なのだと考えらえる．このように，かつての道空間としての利用から，隣接家屋の私物が置かれる





	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
過去の利用	―	～1955 汲み取り船	―	―	―	～1955 汲み取り船	―	近世～ 川祭り	～1955 汲み取り船 洗濯・泳ぐ	―年 舟の係留	―	1955前後 郡部が係留 魚釣り	―	―
現在の状況 （私物）	路地 （木材・鉢） 階段	路地 桟橋	路地 （植栽・缶）	路地 （洗濯物）	塀	路地 桟橋	空き地	路地 桟橋	路地 （植栽・木） 桟橋・階段	植栽	路地 （脚立）	路地 桟橋	塀	塀
現在の利用	駐車	漁業 川祭り	―	洗濯干し	×	魚釣り 精霊送り	―	川祭り	×	水やり	―	×	×	×
パターン	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ

[凡例] ―：不明　×：なし　Ⅰ道としての機能と空間が受け継がれているオリト　Ⅱ：機能は変容しているが道としての空間は受け継がれているオリト　Ⅲ：通行不可能なオリト

図-11　オリト・河川沿い空間の現状

個人の裏庭へとオリトの利用が変化したことが読み取れる．

また，ⅠやⅡでは川祭りの際に，オリトから祭りを見物する地域住民の姿が散見された（図-8）．このように，オリトは特定世帯の共有地であるが，特定世帯の住人に限らず誰もが通り抜けや滞在が可能な空間となり，地域住民の集いの場となっている．

Ⅲは空き地になったことから植栽を植え緑化している場所（j）や，建て替えにより塀の設置や川へ続く階段の埋立て（e，m，n）が行われ，オリトがなくなってしまったものと推測できる．また，Ⅲの 4 か所は全て桟橋や階段がなく，護岸整備もされている場所が多いため，河川側からもアプローチできない場所となっている．

かつてのオリトや西町通り沿いには，私物が置かれていないことが特徴である．

以上より，Ⅰは生業利用が継続されている場所と伝統行事により修復されている場所があり，桟橋が設けられていた．Ⅱは桟橋や階段がない場所もあり，Ⅲにはどちらもない．八尾川は島根県により護岸整備を実施しているため，一度桟橋や階段を撤去すると新設が出来ないが，道空間の機能の存続には桟橋や階段が必要であり，h のように修復する動きがみられる．このように桟橋が修復されるには，オリトを用いた河川の利用が前提となり，桟橋や階段といった河川側からのアプローチとオリトの保存が関連していると考えられる．

4.　地域住民の水辺の活動・愛着の特徴

(1)　アンケート調査概要

本章では，地域住民が河川沿いの活動や，河川景観への認識・評価を把握するためにアンケート調査を実施した．アンケート調査は，文献調査・ヒアリング調査から歴史的に土地所有や河川利用が見られた，八尾川沿いの西町の住民 384 人を対象にした（表-4）．配布方法は，各自治会長へ自治会の所属人数分のアンケート用紙を郵送し，その後各自治会で使用している回覧板とともにアンケート用紙を回して配布した．

アンケートには，まちに対する愛着・持続願望を中心に，その影響要素になると考えられる居住歴，居住地区，オリトの所有の有無，自宅の建て替え時期，土地所有開始時期，生活の様子や河川の知識，河川沿いのまちに対する評価及び活動の様子を問う項目を設けた．生活の様子や河川の知識，まちに対する評価を問う設問ついては，文献調査及び地域住民へのヒアリング結果から設定した．愛着・持続願望とその要因については，河川沿いの風景に対する愛着と持続願望及びその理由を記述式で尋ねた．

以下，本文中の表記は，河川沿いの風景への愛着を持つ（「とてもそう思う」「ややそう思う」）と答えた回答者を愛着がある人，後世に残したい（「とてもそう思う」「ややそう思う」）と答えた回答者を持続願望がある人とする．



図-12　アンケート調査範囲

表-4　回答者属性

性別	回答数	割合	年代	回答数	割合
男性	16	44%	10 代	0	0%
女性	20	56%	20 代	0	0%
居住地	回答数	割合	30 代	1	3%
天神	0	0%	40 代	3	8%
御崎	10	28%	50 代	6	17%
上八尾	2	6%	60 代	4	11%
吉田	12	33%	70 代以上	12	33%
名田	10	28%			
その他	2	6%			

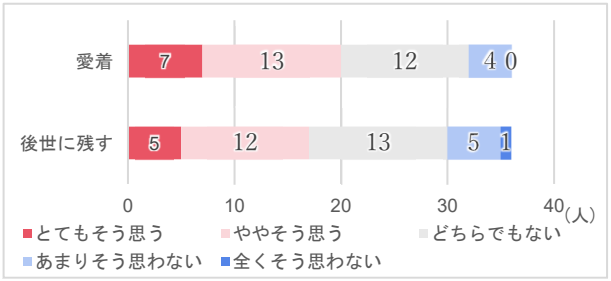


図-13　愛着・持続願望の単純集計結果

(2)　アンケート調査結果

a)　アンケート回答者の基本属性

アンケート対象者の属性とオリトの所有の有無，土地所有開始時期や建て替え時期についてのアンケート結果を表-4 に示す．2023 年 10 月 11 日時点で，36 件の回答が得られた．年齢層は 20 代以下がなく，偏りが見られる．居住地は，天神町からの回答がなく，御崎・吉田・名田地区が主だった．

b)　各河川における愛着の特徴

全 36 件の八尾川の住民の回答のうち，愛着がある人

の割合は約 56%，持続願望がある人は約 47%だった（図-13）．

愛着がある人の内訳を見ると，地区内にオリト所有者がいる上八尾・御崎地区の住民 12 人のうち 11 人が愛着を持っていた．また，愛着がある人 20 人のうち 17 人が河川沿いの風景に歴史・伝統を感じると回答していた．上記の回答者には泳いでしじみ採りや釣りといった幼少期に遊んだ思い出や，汲み取り船や荷下ろしといった，八尾川の利用を知っている人が多かった．子どもの頃の遊びの経験やオリト・河川沿いの利用について知識を持っており，これらが愛着に結びついた可能性がある．愛着の理由には「子どもの頃から川で育ってきた」や「急激な開発をされた訳ではなく昔の姿が残っているから」といった回答があり，自らの体験の有無や昔の面影があるまちなみの存在が愛着につながっていると考えられる．

持続願望がある 17 人のうち，13 人は愛着も持っている人であり，「自分の大切な故郷の町並みを残したい」といった愛着に基づく回答や「ゆっくりとすぎる時間の中で人々の営みを感じられる」といった視覚的な回答がみられた．残りの４人は愛着についてはないが，持続願望がある人であり，「川沿いに家が立ち並び，川には船が係留してあるという風景は港町らしいから」や「港町側からみる西町八尾川沿いは素敵だと思う」といった視覚的な回答がみられた．持続願望がある人は河川沿いの町並みへの評価を問う質問で，「歴史・伝統を感じるか」「美しさ・魅力を感じるか」「観光資源になりうるか」「隠岐らしいと思うか」の視覚情報から答えられる４項目において，17 人中 12 人以上が感じると回答し，八尾川沿いの風景を高く評価した．このように，自らの体験に基づく愛着意識よりも客観的に視対象としていいと思うかといった持続願望との関係性が示唆される．

一方で，愛着はあるが持続願望がない人も７人いた．この理由として，「時代と共に変わっていくのが当然だと思う」や「生活に必要な部分はそちらが優先だと思う．町並みを残すことにそれ以上の価値を今のところ感じない」があり，住み続けたまちだから愛着は感じるものの，それを後世に残すべきだとは感じておらず，時代に併せた柔軟なまちづくりが大事といった内容だった．この 7 人のうち 3 人はオリトを所有していた．また，7 人全員が，子どもの頃からこのまちに住み，例大祭にも２年に１度開催される本祭りに参加するなど地域に関わっている人だった．

(3) 河川利用の変遷と現在の水辺景観の形成過程との関係

本節では，八尾川沿いの空間・利用の変遷と現状の空間的特徴，愛着・持続願望の関係性について考察する．

愛着がある人の一部は，過去の八尾川で遊んだ記憶や河川の利用の知識があることに基づいた愛着であった．年代について詳しく見ると，愛着がある人は全員昭和 55（1980）年以前に遊んだ経験または昭和 55（1980）年代以前の北前船やシラウオ釣りといったオリト・河川利用の知識があった．**図-2** より，昭和（1978）年に小型船から中型船へと漁船が大きくなり，八尾川では橋下が通れないため，河川に係留する船が減った．このように昭和 55（1980）年前後は八尾川の風景が大きく変わる転換期であり，この頃の知識や風景を知っていることが愛着の醸成に大きく影響すると考えられる．また，河川の中での遊びが行われる 1960 年代以前に遊んだ経験を持つ人も愛着がある人の 55%だった．水に浸かる遊びは上流部の開発が始まり，河川が汚染され始める 1970 年代よりも前であり，こうした経験を持つ高齢者と祭り・活動を通した地元住民や家族との交流を通して過去の歴史を知り愛着が醸成されたと考えられる．

持続願望がある人の中には，河川の風景について言及している人が 6 人いた．港町側からの眺めの回答が 2 人，船の係留や営みの風景，河川沿いの風景，八尾橋からの眺めは各１名いた． 3 章より，西町は八尾橋や港町といった河川側から見ると，河川沿いに立ち並ぶ家の中にある階段や桟橋の要素や，家々の隙間から一直線に見える西町の様子や御崎神社が見えるオリトの要素等が，水辺景観を形成している．

近世期，西郷港周辺地区の住民にとって河川は生業の基盤であり，生活に欠かせない場所であった状態から，夕涼みや川祭りの見物といった生活を豊かにする場・自分の場所の一つとして河川の認識は変化し，河川とまちをつなぐ場として水辺やオリトの機能も併せて変化してきた．

今後，八尾川沿いの河川景観を持続させていくには，河川沿いの魅力あるまちなみを残しつつ，持続願望がない人々が挙げているように，その時代に合わせてまちを更新していく必要がある．その際に，河川沿いの風景において守るべき要素を言語化することが課題だと考えられる．その要素の一つとして河川とまちをつなぐオリトは，今後も西郷港周辺地区にとっての大事な要素になりうると考えられる．

5. おわりに

(1) 本研究の成果

現在も漁業集落成立時の空間構成が一部残る西郷港周辺地区を対象とし，文献調査，実測調査，ヒアリング調査，アンケート調査から空間的特徴を分析した．本研究で得られた成果は以下の通りである．

・ 生業を通して築いた河川を中心とした集落構造は，

堤防を作らない防災対策の実施，オリトが共有地であること，伝統行事での利用が継続していることが，オリトを用いた水辺景観の継続に繋がっていることを指摘した．（2 章）

- 過去現在の水辺利用と関わってきたオリトの現状分析から，「道空間が受け継がれているオリト」，「道空間としての形態は継承しているが利用形態が変化しているオリト」，「通行不可能なオリト」の 3 つに分類でき，オリトを用いた河川の利用の有無がオリトの保存に寄与することを指摘した．（3 章）
- 八尾川では 1980 年の各町での思い出や知識が愛着の醸成へと結びつき，今の町並みへの評価が持続願望へと結びつく可能性があることを示唆した．（4 章）

(2) 今後の課題

宇屋川沿いの住民へのアンケートを含めて得られた河川の活動・愛着の精緻な分析を進めるとともに，八尾川・宇屋川沿いの空間・利用の変遷と現状の空間的特徴を踏まえた河川沿いの風景の特徴と地域住民の愛着の関係性を明らかにする．

謝辞：本研究は JSPS 科研費 22H03894 の助成を受けたものです．本研究のヒアリング調査，アンケート調査において，漁業組合の皆さま，西郷港周辺地区の住民の皆さまには多大なご協力を頂いた．心より感謝申し上げます．

REFERENCES

1) 隠岐の島町：島根県　隠岐の島町　西郷港玄関口まちづくり計画，p.16，2020.
2) 後藤吉彦・木下光・丸茂弘幸：篠島における住居表層と街路空間の特性およびその変容に関する研究，都市計画論文集 No.38-3，pp.739-744，2003.
3) 安藤理沙・福島秀哉：現代公共空間の私的利用にみる生活空間の共用に関する地域特性の継承―浦安市元町地区を対象として―，実践政策学，第 4 巻 2 号，pp.223-234，2018.
4) 中嶋伸恵，田中尚人，秋山孝正：水辺空間を基盤とした地域コミュニティの形成に関する研究，土木学会論文集 D　64 巻 2 号，pp.168-178，2008.
5) 藤井容子：男木島の路地および宅地擁壁の特徴からみた街路景観に関する研究，日本建築学会技術報告書，第 22 巻 第 50 号，pp.249-252，2016.
6) 西村信也・棒田恵・渡部裕樹・橋爪隆一・小林勉・石黒翔梧・甲賀達郎・横川遥哉：出雲崎海岸築における町家の空間構成に関する研究　海岸との関係からみる集住の仕組みと居住空間の変容，日本建築学会計画系論文集，第 84 巻　第 759 号，pp.1049-1056，2019.
7) 長坂大：集落における屋外空間の構成と変遷についての研究我が国の現代漁村集落を事例として，日本建築学会計画系論文集　第 494 号，pp.271-79，1997.
8) 田中豊治：隠岐における近代的漁業の侵入とその影響－島嶼経済の構造と解体過程（その４）－，Geographical Review of Japan，27(5)，pp.203-212，1954.
9) 田中豊治：近世隠岐の村落社会構造，古今書院，Geographical Review of Japan，29(5)，pp.280-292，1956.
10) 田中豊治：隠岐島の歴史地理学的研究，古今書院，1979.
11) 小林久高，釜床美也子，安高尚毅：隠岐諸島における舟小屋の分布状況と立地・構法の特性，日本建築学会計画系論文集　第 83 巻第 743 号，pp.21-31，2018.
12) 西郷町誌編さん委員会：西郷町誌上巻，西郷町，pp.6-8，1975.
13) 隠岐の島町：隠岐の島町総合振興計画～隠岐びとのこころをもって～，p.10，2018.
14) 前掲 13)，p.12，2018.
15) 田中豊治：隠岐島の歴史地理学的研究，古今書院，p.165，1979.
16) 西郷町誌編さん委員会：西郷町誌下巻，西郷町，p.803，1976.
17) 西郷町誌編さん委員会：西郷町誌上巻，西郷町，pp.824-827，1975.
18) 前掲 17），p.922，1975.
19) 前掲 17），p.841，1975.
20) 前掲 17），p.959，1975.
21) 東山神社：はちまんさんだより　第２号　川祭り特集号，2023.
22) 前掲 21），2023.
23) 前掲 16），p.223，1976.
24) 前掲 16），p.876，1976.
25) 前掲 16），pp.874,877，1976.
26) 前掲 17），p.843，1975.
27) 前掲 17），p.954，1975.
28) 前掲 16），p.199，1976.
29) 前掲 16），p.223，1976.
30) 前掲 16），p.326，1976.
31) 前掲 17），p.896，1975.
32) 前掲 16），pp.311-326，1976.
33) 前掲 17），p.19，1975.
34) 前掲 16），p.865，1976.
35) 西郷町合併三十周年記念写真集編さん委員会：日本海に浮かぶふるさとアルバム西郷，西郷町，p.44，1989.
36) 佐々高史：写真アルバム　隠岐の昭和，いき出版，pp.192-194，2015.
37) 前掲 35），pp.85，1989.
38) 前掲 16），p.753，1976.
39) 前掲 16），p.334，1976.
40) 前掲 35），p.85，1989,
41) 島根県：八尾川水系河川整備計画，島根県，p.4，2004.
42) 前掲 17），p.20，1975.
43) 前掲 17），p.20，1975.
44) 前掲 16），p.237，1976.
45) 前掲 16），p.1053，1976.
46) 島根県：西郷都市計画整備，開発及び保全の方針，P5，2018.